

超人、悪魔と神、その他

目次

一、超人

二、悪魔と神

三、内的充実

四、修行

五、悪

六、悪の源泉

七、原罪

※ 参考文献

超人

超人について

例えば、ニーチェは、その『ツアラトウストラはかく語りき』という著作のなかで、次のように語っている。その部分を少し引用してみると、次のようになるかと思う。つまり、「……わたしは、あなたがたに超人を教えよう。人間は克服されなければならぬ或物なのだ。あなたがたは、人間を克服するために、何をしたいのか？」

これまでの存在は、すべて、自分自身を乗り越える何物かを創造してきた。あなたがたは、この大きな上げ潮にさからう引き潮になろうとするのか、人間を克服するよりも、むしろ動物にひきかえそうとするのか？

人間から見れば、猿は何だろう？ 嗤笑こしょうの的か、あるいは恥辱ちじよくの痛みを覚えさせるものだ。超人から見たとき、人間は、まさにそうしたものになるはずなのだ。

人間は、動物と超人との間に張りわたされた一本の綱つななのだ。——深淵の上にかかる綱つななのだ。それは、渡るのも危険であり、途中であるのも危険であり、ふりかえるのも危険であり、また、身震いして足をとめるのも危険である。

人間において偉大なところ、それは、かれは橋であって、自己目的ではないということだ。人間において愛さるべきところ、それは、かれが移りゆきであり、没落ぼつらくであるということである。……」

*

*

まず、引用文から説明したいと思うが、「……人間は克服されなければならない或物なのだ」と言っている。それは、この地球上の「生命体」は、最初は、まさに単細胞の「原核細胞」から始まり、やがて、その「原核細胞」から「真核細胞」へと変化（進化）をし、その「真核細胞」からこそ、今日見るような実に多種多様な「動物」へと変化（進化）をして来たとともに、下等動物から高等動物、そして、その高等動物の中からこそ、まさに「人間」というものが誕生して来たということでもある。しかし、人間というのは、決して「最終段階」ではなく、むしろ「人間」という段階は、いわば「途中段階」に過ぎず、その「人間段階」の先には、いわゆる人間を超えた「超人段階」というものがあるということである。だからこそ、「……人間は、動物と超人との間に張りわたされた一本の綱つなであり、また、かれは橋であって、自己目的ではないということだ。人間において愛さるべきところ、それは、かれが移りゆきであり、没落ぼつらくであるということである」と言っている。つまり、「人間段階」というのは、まさに「途中段階」（それは、「橋」でもあり、「移りゆき」でもあり、「没落」するもの）でもあるが、その「人間段階」の先には、まさに「超人段階」があり、その人間を超えた「超人段階」こそは、まさに「新しい人間」の「誕生段階」でもあるということである。

そして、ニーチェが言う、いわゆる『超人』になるためには、次の「三つの段階」を経なければならぬ。まず最初は、「駱駝らくだ」の段階があり、それは、まさに「勤勉と忍耐」の段階である。次は、「獅子」の段階へと進むことになるが、それは、まさに「今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念」などを、すべてばらばらに破壊していく「獅子」の段階である。そして、最後は、邪気のない「幼な子」へと変化しなければならぬということである。それをニーチェ自身の言葉で言えば、それは、次のようなものである。

つまり、「……わたしはあなたがたに、精神の三段の変化について語ろう。どのように

して精神が駱駝らくだとなるのか。駱駝が獅子ししとなるのか、そして、最後に、獅子が幼な子おさになるのか、ということ。……

「……精神にとつて多くの重いものがある。畏敬の念をそなえた、たくましく、辛抱強い精神にとつては、多くの重いものがある。その精神のたくましさ、重いものを、もつとも重いものをと求めるのである。……」（中略）

「……こうしたすべてのきわめて重く苦しいものを、忍耐強い精神は、その身に引き受ける。荷物を背負つて砂漠へいそいで行く駱駝らくだのように、精神は彼の砂漠へといそいで行く。……」

しかし、もつとも荒涼たる砂漠のなかで第二の変化がおこる。ここで精神は獅子ししとなる。精神は自由をわがものにして、おのれの求めた砂漠における支配者になろうとする。

精神はここで、かれを最後まで支配したものを探す。精神はかれの最後の支配者、かれの神を相手取り、この巨大な竜と勝利を賭けてたたかおうとする。（中略）

わが兄弟たちよ！ なんのために精神において獅子が必要なのであるか？ 重荷を背負い、あまんじ、畏敬する動物では、どうして十分でないであろうか？

新しい価値を創造する、——それは、獅子にもやはりできない。しかし、新しい創造のための自由を手に入れること——これは、獅子の力でなければできない。

自由を手にいれ、なすべしという義務にさえ、神聖な否定をあえてすること、わが兄弟たちよ、このためには獅子が必要なのだ。……」

*

*

さて、ここに出て来る「巨大な竜」というのは、まさに（キリスト教的な「価値観や道徳観」）であり、そして、その「巨大な竜」（神）との戦いに勝利するとは、すなわち、その（キリスト教的な「価値観や道徳観」）から開放されることによつてこそ、まさに「心の自由」を得るということである。——というのも、ニーチェの家系は、もともと聖職者が多かったので、当然のことながら、すべてが（キリスト教的な「価値観や道徳観」）のなかで生まれ育ち、まさに（キリスト教的な「価値観や道徳観」）にどっぷり支配されていたとともに、そのような「価値観や道徳観」から開放されて、いわゆる「心の自由」を得るためには、——つまり、この世のいかなる「価値観や道徳観」にも支配されず、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間として「新たに誕生する」ためには、その「最大の重し」（つまり（キリスト教的な「価値観や道徳観」）というものを、どうしても取り除かなければならなかったということである。

まず、「駱駝らくだ」というのは、ひたすら自分の「内的成長」を心の底から願つて、まさに一心不乱に「努力を積み重ねる時期」であるということである。それは、例えば、書物であれ、芸術や学問、その他、何であれ、古今東西の真に優れた「魂」と深く交わることによつて、ひたすら自分の「内的成長」を心の底からこいねがって、まさに一心不乱に「無限の努力を積み重ねる時期」であるということである。

次は、「獅子」の段階であるが、この段階は、前述のような本格的な「思考（思索）活動」を何年も積み重ねることによつてこそ、今まではそうだと思つていたことも、実はそうではなく、それではこうなのかと何度も何度も考え方を新たにしていこううちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまふ、また、自分というあれこれの性格や考え方も空中分解してしまつて、もう何がなんだか自分で

もよく分からない状態に深く陥ってしまう世界であり、それこそは、まさに「虚無の世界」であり、そして、その「虚無の世界」のどん底から、そこは、まさに「すべての意味や価値などが消えてしまうような世界」であるが、その「虚無の世界」のどん底から、やがて、真に「内的成長」することによってこそ、いわゆる「心の自由」を得ることである。それは、例えば、キリスト教や仏教、その他、この世のいかなる「価値観や道徳観或いは様々な既成概念」などからも、まさに「開放されて、心の自由を得る」ということである。それは、例えば、「大空のような無色透明な心」を獲得することである。

さて、最後は、「幼な子」という段階であるが、その「幼な子」については、ニーチェ自身、次のように説明をしている。つまり、「……しかし、わが兄弟たちよ、答えてごらん、獅子でさえできないことが、どうして幼な子にできるのだろうか？ どうして奪取する獅子が、さらに幼な子にならなければならないのだろうか？

幼な子は、無垢である。忘却である。そして、ひとつの新しいはじまりである。ひとつの遊戯である。ひとつの自力で回転する車輪、ひとつの第一運動、ひとつの聖なる肯定である。と……」

さて、ニーチェが言う「幼な子」とは、一体、どのような存在になるのだろうか？ それは、次のようなものになるかと思う。

まず、「……幼な子は、無垢である。忘却である」と言っている。それは、いわゆる「虚無の世界」のどん底から、そこは、まさに「すべての意味や価値などが消えてしまうような世界」であるが、その「虚無の世界」のどん底から、やがて、真に「内的成長」することによってこそ、いわゆる「心の自由」を得ることであるが、それは、「大空のような無色透明な心」（つまり「無垢の心」）を獲得することになるとともに、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間として「新たに誕生することにもなるのである。そして、そういう精神の自立した一人の人間として「新たに誕生することによってこそ、初めて、「新しい価値を創造する」こともでき得るようになるのである。

それでは、ここで「幼な子」の特徴というものを、幾つか挙げておきたいと思う。まず、幼な子は、「無垢であり、邪気がない」と言われることが多いかと思うが、それは、すなわち、「悪意がない」ということであるとともに、幼な子は、まさに「今を生きている」ということでもある。そして、「今を生きている」というのは、大人のように、「過去」にこだわったり、「過去」に振りまわされることもなく、また、「明日」（将来）のことを思わねばならないこともなく、まさに「今がすべてと生きている存在である」ということである。しかも、われわれ人間を苦しめているものは、仏教で言うところの「四苦」という「考え方」、それは、一つは、そもそも生きていること自体が「苦しみ」であり、また、病にかかることが「苦しみ」であり、そして、年老いることが「苦しみ」であり、さらに、死ぬことが「苦しみ」であるという、そういう「意識」などは全く持たずに、まさに「今がすべてと生きている存在」こそは、まさに「幼な子」であるということである。

さらに、身分や家柄を初めとして、学歴、職歴、職種、社会的地位、仕事や趣味或いは遊び、その他の諸能力の優劣、資産（経済力）、身体的能力、容姿・容貌、恋愛歴、様々な所有物、その他、そういう様々なことで思いわずらうこともなく、幼な子は、そのようなものからも「完全に開放されていて、まったくの自由である」ということである。

つまり、この世のありとあらゆるものから開放されているとともに、自分だけでも足りているという存在こそは、まさにニーチェの「幼な子」であり、しかも、その「幼な子」が、そのまま「超人」となるためには、身体は、大人のような「逞しい肉体」を持ち、一方、精神は、いわゆる「大空のような無色透明な心」（つまり「無垢の心」）を獲得しているとともに、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間として「新たに誕生する」存在でなければならぬ。それが、すなわち、「人間」という段階から、まさに「超人」という段階へと「成長・進化」した存在ということである。——しかも、この「超人」は、「人生」を肯定し、この世を「肯定」し、そして、「人生」をたくましく生きていく存在であり、あの世での「幸せ」をひたすらこいねがうような存在ではない。この世に生き、この世で満足し得る存在であり、それが、まさに「永劫回帰」であり、その「永劫回帰」というのは、次のようなものである。

*

*

まず、宇宙の初めは、時間も空間も物質もない「無」（「真空」）の状態であったという。そして、そのエネルギーの高い「真空」状態では、絶えず小さな「ゆらぎ」が生じては消えている状態であったが、やがて、その「真空のゆらぎ」から「宇宙」のたねのようなものが生じては光よりも速い速度で「膨張」（インフレーション）を起こし、その宇宙のすべての物質を含む一センチぐらいの超高温・超高密度の「火の玉」状態になったときに、まさに「ビッグバン（大爆発）」が生じたと同時に、凄まじい勢いで「膨張・拡大」を始めることになるわけだが、それが今から約一三八億年前のことになるわけである。

そして、その「ビッグバン（大爆発）」直後は、まさに「超高温世界」で、いわゆる「光子」をはじめ、「電子」や「クオーク」などが飛び交うような状態であった。また、一〇万分の一秒後、温度は、一兆度に下がり、いわゆる「クオーク」が結合をして、まさに「陽子」や「中性子」などが生じるようになったという。そして、三分後、温度は、一〇億度まで下がり、いわゆる「陽子」と「中性子」とが結びついて、初めて「原子核」が誕生することになるわけである。それから約三十八万年後に、その「原子核」と自由に飛び交っていた「電子」とが結びつき、最初の「原子」である、いわゆる「水素」や「ヘリウム」などが誕生することにもなるわけだ。そして、自由に飛び交っていた「電子」が「原子核」と結びつくことによって、「光子」がまっすぐに進むことができる、いわゆる「宇宙の晴れ上がり」状態になったというわけである。それが、いわゆる「ビッグバン（大爆発）」から約三十八万年後ということである。

その後、最初の巨大な「星（恒星）」が誕生し、その内部の「核融合反応」によって、まさに「水素が燃焼してヘリウムを生み出す」という、それは、「水素→ヘリウム→炭素→ネオン→酸素→ケイ素→鉄」とそれぞれ同じように「核融合」を起こし、その巨大な「星（恒星）」は、膨張と収縮を繰り返しながら、最後は鉄で核融合は止まり、まさに「超新星爆発」を起こすとともに、様々な「物質」（例えば、ケイ素、イオウ、塩素、アルゴン、ナトリウム、カリウム、カルシウム、チタン、クロム、マンガン、鉄、その他）なども新たに「宇宙空間」にばらまかれ、その「宇宙空間」にばらまかれた「物質」がまた集まって新たな「星（恒星）」を生み出すという、そういう「誕生と消滅」とを無限に繰り返しながら、数多くの「星（恒星）」その他の物質などを含んだ「原始銀河」が形成されるとともに、その「原始銀河」から実に数多くの「銀河」へと「進化」（変化）し、

そして、その広大なる「宇宙空間」には、何と約七兆以上の「銀河」が存在するとともに、その一つの「銀河」の中にも、約数千億の「星（恒星）」その他が存在しているという。それこそは、まさに「誕生と消滅」とを永遠かつ無限に繰り返して止まない、まさに「この世」（全宇宙）の「永劫回帰」に他ならないのである。

そして、その広大なる「宇宙空間」に、やがて、われわれの「銀河系」（つまり「天の川銀河」）というのは、今から約一三二億年前に誕生し、そのわれわれの「銀河系」（つまり「天の川銀河」）のなかに、約四十六億年前に、われわれの「太陽系」が新たに誕生して、その「太陽系」の第三惑星こそは、まさにわれわれが「地球」であるが、その「地球」に約四十億年前に誕生した「生命体」も、同じように「誕生と消滅」とを無限に繰り返しながら、今日見るような美に多種多様な「動植物」へと変化（進化）をして来たという、そういう、まさに「生命体」における「永劫回帰」を無限に繰り返しながら、われわれ人類も、また、われわれ一人一人の「人間」（個人）も、同じように「誕生と消滅」とを、全人類が滅び去るまで、永々と無限に繰り返して止まない存在であるということである。

* * *

そして、「……これが——人生というものであったか？ わたしは死に向かって言おう。よし！ それならもう一度！」と。つまり、たとえ「人生」がどれほど苦に満ちていようとも、「あの世」での「幸せ」をひたすらこいねがうのではなく、「あの世」は、「あの世」として、この世を「肯定」し、この世での「人生」をたくましく生きようとする存在であり、また、われわれ人間の「時間の観念」というのは、どうしても「過去、現在、未来」という形に囚われやすいが、しかし、「実際」は、まさに「今」という時間だけが永遠に続くだけであり、この「今」という時間だけを肯定して生きるということである。それは、大人のように、あれこれ「過去」にこだわり、「過去」に振りまわされるのではなく、また、「明日」（将来）のことを思わずらうことでもなく、（それらは、すべて「幻影」に過ぎないのであり）、まさに「今がすべてと生きる存在であれ！」ということである。——つまり、われわれ人間の「永劫回帰」というのは、まさに「今」という時間を命ある限り、無限に果てしなくどこまでも繰り返して生き続ける状態のことであり、それこそは、まさに「今」という時間を無限に果てしなくどこまでも繰り返して止まない、まさに「永劫回帰」であり、その「今」がどのような状況であろうとも、たとえよくても悪くても、そのようなことにこだわるのではなく、その「今」を、「よし、それなら」と肯定をし、その「今」を、まさにたくましく生きようとする「意志」なのである。

例えば、ニーチェには、仏教のような、いわゆる「輪廻転生」（それは「この世からあの世、あの世からこの世」というような「考え方」はないのであり、それゆえ、ニーチェにあるのは、この世での「永劫回帰」だけであり、それは、まさに「今」という時間を命ある限り、無限に果てしなくどこまでも繰り返して止まない、まさに「永劫回帰」であり、その「今」がたとえどのような状況であろうとも、その「今」を無闇やたらと嘆き悲しむのではなく、むしろ、その「今」を、「よし！ それなら」と肯定をし、その「今」をたくましく生きようとすることである。——つまり、大事なことは、まさに「今」を、まさに「たくましく生き抜くこと」であり、——例えば、古今東西の優れた「思想」

その他などの囚人（囚われの身）（奴隷）となることではなく、むしろ、そこから新たな「意義あるもの」を真に学び取ることこそ、何よりも大事なことになるのである。

つまり、何よりも大事なことは、真に「内的成長（成熟）」することによって、いわゆる「心の自由」を得ることであり、それは、「大空のような無色透明な心」（つまり「無垢の心」）を獲得し、そして、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間として「新たに誕生する」ことによってこそ、初めて、「新しい価値を創造する」こともでき得るようになるのである。

それは、本格的な「思考（思索）活動」を何年も積み重ねては、今まではそうだと思っていたことも、実はそうではなく、それではこうなのかと何度も何度も考え方を新たにしていこううちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまつて、もう何がなんだか自分でもよく分からない状態に深く陥つてしまう世界であり、それこそは、まさに「虚無の世界」であり、その「虚無の世界」のどん底から、そこは、まさに「すべての意味や価値などが消えてしまうような世界」であるが、その「虚無の世界」のどん底から、やがて、真に「内的成長」することによってこそ、いわゆる「心の自由」を得ることになるが、その「心の自由」を得ることによってこそ、この世のありとあらゆる「価値観や道徳観」などから開放されるとともに、自分だけでも足りているという存在こそは、まさにニーチェの「幼な子」であり、しかも、その「幼な子」が、そのまま「超人」となるためには、身体は、大人のような「逞しい肉体」を持ち、一方、精神は、いわゆる「大空のような無色透明な心」（つまり「無垢の心」）を獲得しているとともに、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間として「新たに誕生する」存在でなければならぬ。それが、すなわち、「人間」という段階から、まさに「超人」という段階へと「成長・進化」した存在ということである。

しかも、その「超人」は、「人生」を肯定し、この世を「肯定」し、そして、「人生」をたくましく生きていく存在であり、この世に生き、この世で満足し得る存在であり、それが、まさに「超人」なのである。

ナポレオンの「脳」について

例えば、ナポレオンは、「……余が辞書に不可能という文字はない」と、そう語つたという「逸話」（エピソード）が残されているが、もちろん、その真偽はともかくも、恐らく、ナポレオンという人は、いわゆる「不可能を感じないような脳」を持ち合わせていたに違いない。そして、その「脳」こそは、まさに「一級」（或いは「超一級」）の「脳」であり、その「脳」こそは、まさにこの世にある実に様々な「不可能」を、やがては「可能」に変えていく唯一の「脳」でもあるということである。

一方、われわれ人間の一般的な「脳」というのは、実にいろいろなことで「不可能」を感じ、なかなかその「壁」を突破できないままであるが、いわゆる「不可能を感じないような脳」であれば、それらの「壁」は、もちろん、「壁」とも感じないものであるが、次から次へと難なく突破していけるということであり、それゆえ、その「脳」が真にフル稼働すれば、恐らく、この世にある実に様々な「難題や難問」なども、やがては

解決していける可能性を秘めているということである。なぜなら、まさに「不可能を感じ、ないような脳」であるからであるとともに、その「脳」は、真に「内的成長（成熟）」することによってのみ、初めて、獲得される「脳」（つまり「超人の脳」）でもあるのである。

*

*

不可能を

感じぬ脳こそ

超人なり

悪魔と神

さて、「悪魔」というのは、まさに「悪」を本体としている存在であり、それゆえ、いわゆる「善」を本体としているような存在がいちばん嫌いであり、それは、例えば、「一なる神」を初めとして、様々な「神々」、そして、われわれ人間のなかでは、いわゆる「善」的な人間がもっとも気に入らないということになるかと思う。それゆえ、それらの対象に対して、実に様々な「悪さ」を仕掛けることになるわけである。そのひとつが、いわゆる『誘惑』というものであり、例えば、『旧約聖書』のなかのアダムとイブは、神から絶対に食べてはいけないと言われていた《禁断の「木の実」》を、いわゆる《ヘビの「巧みな誘惑」》に負けて、二人して食べてしまい、その結果として、神の怒りにふれて、いわゆる「エデンの園」から追放されてしまうわけである。それが、まさにわれわれ人間の「原罪」(つまりは「弱さ」ということになるのである)。

また、『新約聖書』のなかで、イエスは、荒野に四十日間、何も食べずに孤独彷徨^{ひとりさまよ}っていたが、やがて、空腹を覚えた時に、そこに悪魔が現われて、次のような非常に有名な「三つの誘惑」を仕掛けるわけである。一つは、「……神の子なら、そこらの石ころに、パンになればと命令したらどうです」。それに対して、イエスは、「……パンのみで人は生きるのではない」と。次に、「……神の子なら、ここから下へ飛びおりましたらどうです。神は天使たちに命じて、あなたを守ってくださるだろう」と。それに対して、イエスは、「……あなたの神なる主を試みてはならない」と。そして、最後に、悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての王国とその繁栄を示して、「……もし伏してわれを拜むならば、これらすべてをなんじに与えよう」と。それに対して、イエスは、「……悪魔よ、消えて失せよ」と。もちろん、これらの内容の厳密な吟味は措くとしても、この時のイエスは、少なくとも様々な「欲望や感情」などの支配から解放されて、いわゆる「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」)に全面的に支配されていたことになるだろう。そうでなければ、「悪魔の誘惑」を退けることは、でき得ないからである。もちろん、われわれ人間の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」)というのは、決して完全なものではなく、それゆえ、実に様々な「弱さや欠陥」などを持ち合わせてはいるが、しかし、基本的には、そういうことが言えるのではないかと思う。

また、釈迦は、二十九歳の時に出家をし、そして、三十五歳の時に「悟り」を開くことになるが、その最後の段階では、ほとんど骨と皮になってしまい、そこで、釈迦は、そのような「苦行」をやめて、近くの河で沐浴^{もぐよく}をし、そして、村の娘スジャータからミルクがゆをもらって体力を回復したあと、近くの大樹(菩提樹)の下で、四十九日間、深い「瞑想」に耽入^{さまた}ることになるのである。——その時に、「魔王」は、釈迦が「悟り」を開くのを何とか妨げようと、例えば、「魔王」は、自分の軍勢に様々な攻撃をさせるが、それらはことごとく失敗に終わり、また、自分の「三人の娘」(それは「愛執と嫌悪と貪欲」などであるが)、彼女たちを送って、釈迦を誘惑させたりするが、釈迦は、その誘惑に対しても、まったく見向きもしなかったということである。そして、釈迦は、ついに四十九日目に「悟り」を開き、いわゆる「大悟」を成し遂げることになったということである。

そのように、「悪魔」の最大の特徴というのは、直接、相手に「危害」をくわえるというよりは、(もちろん、そういう場合もあるだろうが)、むしろ「相手の弱み」に巧みにつ

け入るということであり、例えば、「権力」に弱い人には、「権力」で「誘惑」をし、「金」に弱い人には、「金」で「誘惑」をし、そして、「異性」に弱い人には、「異性」で「誘惑」をするというのが、まさに「悪魔」の最大の特徴になるかと思う。それは、なぜかと言えど、それは、「悪」を本体としている「悪魔」にとつて、いわゆる「善」的な存在がもつとも気に入らない存在であり、それゆえ、その「善」的な存在が、何らかの「甘い誘惑」に負けて、いわゆる「善」的な存在からまさに「悪」的な存在へと落ちていく、その姿を見るのが、この上もない言葉では言い表せないほどの「無上の喜び」になるということである。それゆえ、「悪魔」というのは、いわゆる「善」的な存在を何らかの「甘い誘惑」で仕掛けては、まさに「悪」的な存在へと貶めることに、この上もない生き甲斐を感じているような存在ということになるのだろう。

*

*

一方、「神」というのは、まさに「善」を本体としている存在であり、それゆえ、何よりも「善」的なことを好むという特性があるかと思う。それでは、「悪」に対しては、一体、どうかと問われれば、これは、非常に難しい問題であり、例えば、「善」を好み、そして、「悪」を憎むということであれば、それは、われわれ人間と基本的には全く変わりようのない存在になってしまいうだろう。それゆえ、「神」というのは、われわれ人間的な「善悪」を遙かに「超越した存在」でなければならぬのである。

例えば、「……あなた達は、〃隣の人を愛し、敵を憎まねばならない」と命じられたことを聞いたであろう。しかしわたしはあなた達に言う、敵を愛せよ。自分を迫害する者のために祈れ。あなた達が天の父上の子であることを示すためである。父上は悪人の上にも善人の上にも目をぼらせ、正しい人にも正しくない人にも、雨をお降らしになるのだから。自分を愛する者を愛したからとて、なんの褒美がある。人でなし税金取りでも同じことをするではないか。また兄弟だけに親しくしたからとて、なんの特別なことをしたのだろう。異教人でも同じことをするではないか。あなた達は、天の父上が完全であられるように、〃完全になれ……」と。これが、まさに「一なる神」の「考え方」であり、また、これが、「一なる神」の「愛」ということになるのだろう。

もちろん、これは、「一なる神」の「愛」であり、それゆえ、われわれ人間の「愛」ではない。そして、われわれ人間の「愛」というのは、どうしても「善」を好み、そして、「悪」を憎むというような傾向が強いかと思うが、それは、それでよいのだろうか。ただ「問題」なのは、「悪」に対して、「悪」で立ち向かえば、相手も自分も「悪の連鎖」に深く落ちてしまう。それでは、「悪」に対して、一体、何で立ち向えばよいのだろうか？ それが「最大の問題」になるかと思うが、結論から言えば、次の「五つの方法」しかない。つまり、——一つは、「悪」に対して、「悪」で立ち向かうような場合。一つは、「悪」に対して、「見て見ぬふり」をするというような場合。一つは、「悪」に対して、「善」で立ち向かうような場合。一つは、「悪」に対して、「善」で立ち向かうような場合である。

まず、「悪」に対して、「悪」で立ち向かうような場合。それは、まさに「目には目を、歯には歯を」であるが、この方法で、問題が解決する場合もあれば、相手も自分も「悪の連鎖」に深く陥ってしまう場合もある。次に、「悪」に対して、「見て見ぬふり」をするというような場合。この場合は、いわば「無関心」を装うということであり、まさに「さ

わらぬ神に崇りなし」というような、何よりも「自分の安全」を最優先させるということであり、誰でも自分がいちばん可愛いわけであるから、もっともな対応になるかと思う。ただ、これでは根本的な問題の解決にはならないのだろう。次に、「悪」に対して、「相手にしない」というような場合、この場合は、いわゆる「相手の挑発に乗らない」ようにするという対応であり、例えば、その場合は、笑ってごまかすとか、電話には、出ないようにするとか、あるいは、あたりさわりのないようなことでお茶を濁すとか、その他、とにかく相手の挑発に乗らないように臨機応変に対応することである。

次に、「悪」に対して、「善」で立ち向かうような場合。この場合の「善」というのは、例えば、「説得やお願い」、その他の方法で、いわゆる「悪」的な行為をやめさせたり、阻止したりすることである。——例えば、何か悪いことをしていることに対して、親が子に対して、先生が生徒に対して、また、関係者が一般の人たちに対して、或いは、他人が他人に対して、その他、それは、もうどのような人間関係であるを問わず、いわば「説得」でそれをやめさせるような場合であり、また、「お願い」というのは、前々から「お願い」をしてある場合と、その場で、「お願い」をするような場合があるかと思うが、例えば、決められたことは、守るようにしてくださいとか、あるいは、ここは禁煙なのでよろしくお願いしますとか、その他、そのようなことである。むろん、そのような「説得やお願い」がうまくいくような場合もあれば、うまくいかない場合もあるのだろう。

最後に、もう一つは、「悪」に対して、「愛」で立ち向かうような場合であり、それは、例えば、シヤカやキリスト、その他、そのような人たちであれば、いわゆる「慈悲」や「愛」などによって、いわゆる「悪」的な状態に深く陥っている人たちも、本来あるべき「善」的な存在へと導くというようになるのだろう。

むろん、それに加えて、いわゆる「神」(或いは「神々」というのは、まさに「善」を本体としている存在であり、それゆえ、何よりも「善」的なものを好むものではあるが、ただ「一なる神」に比べて、その他の「神々」というのは、どうしても「人間的要素」も含まれて来るので、「一なる神」とは少し違って来るのだろう。つまり、キリスト教の「神」というのは、まさに「全知全能的な神」であり、それゆえ、「人間界」だけではなく、「自然界」や「動植物界」、その他、すべてを含めて、大きく見守っている存在であるとともに、「人間界」に対しては、いわゆる「悪」的な状態に深く陥っている人たちをも含めて、本来あるべき「善」的な存在へと導くというようになるのだろう。

一方、「神々」というのは、基本的には「神々」としてのそれぞれの「持ち場」をしつかりと守っている存在であるとともに、多くの場合、自然宗教的な「神々」であり、それゆえ、人間とは「ギブ・アンド・テイクの関係」である場合が多く、例えば、人間側からは、「まつる、供える、儀式、祭り、信仰、その他」を行ない、一方、神々からは、「秩序、豊かさ、豊作、成就、安全、その他」を得ることになるのだろう。

*

*

ちなみに、釈迦に向けて放たれた魔王の軍勢の「矢」、その他を、釈迦は、ことごとく「花」に変えてしまうのであるが、その場合、向かって来る矢を、逆に、相手側に向けて放てば、それは、「悪」に対して、「悪」で立ち向かうことになり、いわゆる「悪の連鎖」に深く陥ってしまう可能性が高くなるのだろう。また、向かって来る矢を相手側に向けずに、下に落とすとか相手の攻撃をやめさせるとかすれば、それは、「悪」に対して、「善」

で立ち向かうということであり、前者は、「悪」を相手にしないという方法であり、後者は、「悪」を「説得」するという方法になるかと思う。そして、向かって来る矢をことごとく「花」に変えてしまうというのは、「悪」に対して、「愛」で立ち向かうこととであり、それは、「愛」や「慈悲」などによって、いわゆる「悪」（ここでは「武器としての矢」というものをことごとく無力化するとともに、本来あるべき「善」的な存在へと人や物その他などを導くということでもあるのだろう。

*

*

最後に、なぜ釈迦やイエスなどは、その「最終段階」において、いわゆる「悪魔の誘惑」というものを受けねばならなかったかと問えば、それには、非常にはつきりとした理由があるからである。例えば、富士山で言えば、九合目から頂上近くまで来ると、自分は、もう「最終段階」にまで来ているのではないかとふと思いつくような時期にあたるわけである。しかし、ほんとうにそうなのかどうかは、本人でもわかりかねるところがあるわけである。そこで、自分は、ほんとうに「最終段階」にまで来ているのかどうかを「最終確認」するためにも、それぞれの「煩惱」に対して、あらためて自分自身に「問う」てみるようなことが、自ずと（無意識のうちに）生じて来るということである。——つまり、それは、本人が意識的にそういうことを行なっているというよりは、むしろ本人にもそういう自覚のほとんどない、いわば「無意識の状態」で行なわれるものであり、それが、まさに「悪魔」というような姿」で現われて来るということである。

例えば、釈迦は、いわゆる「三魔女の誘惑」を受けることになるが、それは、自分自身に対する「最終確認」でもあり、ほんとうに、自分は、最終段階まで来ているのか、自分は、ほんとうに「愛執、嫌悪、貪欲」から開放されているのかどうか、それらの「最終確認」になるかと思う。——つまり、自分は、ほんとうに「愛執」から開放されているのか、また、自分は、ほんとうに「嫌悪」（人を嫌悪する心）から開放されているのか、そして、もう一つは、自分は、ほんとうに「貪欲」から開放されているのか？ それらに対する、まさに徹底した「最終確認」になるかと思う。つまり、悪魔の誘惑というような形で、「……おまえは、ほんとうに『愛執』の思いは、消えているのか。妻や子供が恋しくはないのか。ほんとうは、妻や子供に会いたいのだろう。正直に答えてごらん。また、魅力的な女性にふと心奪われることは、もうほんとうにないのか。ふとセックスがしたいという気持ちに襲われることは、もうほんとうにないのか。正直に答えてごらん。……」。また、「……おまえは、ほんとうに『嫌悪』から開放されているのか。ふと『人を嫌ったり、あるいは人を憎むようなこと』は、もうほんとうにないのか。あるだろう。正直に答えてごらん。ほんとうはあるんだろう。……」。そして、もう一つは、「……おまえは、ほんとうに『貪欲』から開放されているのか。なにかおいしいものが食べたいと思うことは、ほんとうにもうないのか。腹一杯食べたいと思うようなことは、もうほんとうにないのか。時にはあるだろう。正直に答えてごらん。……」。その他、そのような「悪魔からの誘惑」ということになるかと思う。

もちろん、イエスの場合にも、悪魔から有名な「三つの誘惑」を受けることになるが、それも基本的には全く同じことであり、釈迦もイエスも、そのような「悪魔からの誘惑」に対して、少しでも「心が揺れる」（或いは「心が動く」というようなことは、全くかけらもなかったということこそが、最も大事な認識になるかと思う。なぜなら、それこそは、

まさに極めて厳密な意味での「最究極段階」にまで到達していたという「決定的な証拠」（あかし）ともなるものだからである。

*

*

ところで、今日、「悪魔」の存在を「科学的に実証」することは、ほとんど不可能であり、それゆえ、ほとんどの人たちは、「悪魔」などは、どこにも存在しないのだと思っているかと思う。それは、それで正しい「考え方」ではあるが、しかし、釈迦やイエスなどが語っている「悪魔」というものにめぐり逢える可能性は、文字通り、100%完全に閉ざされた、まさに「ゼロの状態」であるというよりは、むしろ、その可能性は、ほんのわずかも知れないが残されているのである。それは、一体、どのような「意味合い」なのかと問えば、それは、次のようなことになるかと思う。

例えば、病气や事故、その他などで「瀕死の状態」（つまり「臨死状態」）になった人が、やがて、意識を取り戻したあと、まわりの人に、実は「こういう夢を見たんだよ」ということで、実に多くの人たちが語るのが、いわゆる「三途の川」の話になるかと思う。それは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、つまり、われわれ人間が、まさに「瀕死の状態」（つまり「臨死状態」）になった時には、なぜかは分からないが、そのような「夢」を見るような、いわば「脳の状態」になりやすいということである。だとすれば、釈迦やイエスなどが置かれていた状態と、全く同じような状態に自らも置いてみれば、同じような「悪魔の誘惑」を受けような経験をする可能性は、わずかでも出て来るということである。そして、そのような「内的経験」（つまり「悪魔の誘惑」その他）の先にこそ、いわゆる「最究極段階」（つまり「大悟の世界」）が待っているというようなことであり、そして、そのような「内的経験」をすることこそは、まさに「神秘的経験」の一つということになるのだろう。

それでは、釈迦やイエスと全く「同じような状態」になるとは、具体的には、一体、どのような状態になることなのか？ それは、次のようなことになるかと思う。つまり、一つは、釈迦もイエスもほとんど、「最究極段階」まで到達していたということである。それゆえ、いわゆる「悪魔の誘惑」というのは、まさに「最後の最後の段階」に訪れる、まさに「最究極の関門」ということになるのだろう。そして、そのような「悪魔の誘惑」が訪れるためには、釈迦は、まさに「四十九日間の瞑想」が、どうしても必要不可欠であったとともに、イエスは、まさに「四十日間、荒野を彷徨う」ことが、どうしても必要不可欠であったということである。そして、その時の「釈迦やイエス」の身体というのは、まさにほとんど「瀕死の状態」（つまり「臨死状態」）に極めて近い状態であったということであり、それは、身体的部分の働きは、限りなく「ゼロに近い状態」になり、かわって、まさに「精神的部分」（つまり「魂」そのもの）だけの状態となって、孤独「思惟活動」（つまり「瞑想」など）にどこまでも深く溶け入っているような時にこそ、初めて「悪魔」が現われて、その「悪魔の誘惑」を受けたということである。

そして、この時、釈迦やイエスは、実際に「悪魔の姿」を見、実際に「悪魔の声」を聴いたという可能性も、まったくゼロではないということである。それは、一般に、「幻視・幻聴」と呼ばれるものであり、確かに、科学的には「幻視・幻聴」になるのかも知れないが、しかし、当人に見れば、間違いなく、「悪魔の姿」を見、そして、「悪魔の声」

を聴いたという「現実のこと」（或いは実際に体験した「内的経験」）として受け止めたとしても、それを一概に「でたらめのこと」として片付けるわけにもいかないだろう。もちろん、実際は、どうだったかは、もう誰にも分からないことではあるが、しかし、好んで「うそを言う」ような人たちでもないということである。もちろん、ここで最も大事なことは、そのような「内的経験」ではなく、そのような「内的経験」を経て、いわゆる「究極段階」（つまり「大悟の状態」）にまで到達したという事実の方が、遙かに大事なことであるとともに、いわゆる「悟り」や「回心」などをめざすような人たちであれば、当然のことながら、その過程では、実に様々な不可思議な「内的経験」をすることになるかと思うが、しかし、その「内的経験」というのは、人によってそれぞれみな違って来るということでもあるのだろう。

*

*

甘き畏わな

仕掛しかけて誘さそふ

悪魔かな

内的充实

内的充実について

例えば、われわれ人間は、いわゆる「空腹」を感じれば、とにかく何かを食べなければならず、それは、まさに「生きるがための食事」ということである。しかし、一方、われわれは、どうせ食べるなら、できるだけ美味しい料理を食べたいとも思うわけである。それは、ただ単に「空腹」を満たすためだけでなく、むしろ「より強い満足感」を得たいという欲求でもあるということである。それゆえ、「山ほどの美味しい料理」と「お茶漬けや握り飯のような素朴な料理」とがあった場合、多くの人たちは、当然のことながら、どうせ食べるなら、「山ほどの美味しい料理」を食べたいと思うわけである。それは、なぜかと言えば、それは、それだけ「より強い満足感」が得られるからである。

ところで、その人が真に「内的成長」して、うそ偽りなく、真に「内的充実」している人であれば、「山ほどの美味しい料理」も「お茶漬けや握り飯のような素朴な料理」でも、基本的には「同じ料理」であり、それゆえ、ことさらに「山ほどの美味しい料理」を食べ、できるだけ「より強い満足感」を得ようとする必要がないということである。確かに、生きるためには「空腹」は満たさなければならぬが、しかし、ことさらに美味しい料理を食べ、できるだけ「より強い満足感」を得ようとする必要がないということである。それは、一体、何故なのかと問えば、それは、その人の「心」(精神)そのものは、すでに十分に「充実している状態」であるので、それゆえ、何も美味しい料理を食べ、ことさらに心を「より強い満足感」で満たす必要がないということである。

つまり、その人は、「山ほどの美味しい料理」を出されれば、それを黙って「美味しく食べる」し、また、「お茶漬けや握り飯のような素朴な料理」を出されれば、それを黙って「美味しく食べる」ということである。それは、結局、どういう料理である必要はなく、どういう料理であれ、目の前の「料理」を「美味しく食べられる」ということであり、そのように目の前の「料理」を「美味しく食べられる」ということこそは、すなわち、「幸せなこと」であるということである。なぜなら、料理によって、自分が意味なく振りまわされるといえないからである。それは、衣服類でも、ことさらに「身を飾り立てる」必要もなければ、また、豪邸に住もうが、あばら屋に住もうが、「心」(精神)そのものが、真に「内的充実」している人たちにとっては、どちらでも全く同じことなのである。

例えば、ソクラテスやシヤカあるいはイエス・キリストなどは、精神的には極めて「充実」していたわけであるが、物質的には、ほとんど「乞食と同じような生活」であり、それゆえ、「食べるものも着るものもまた住む家も極めて貧しいもの」でありながら、どうしてそのような「生活」にこともなく耐えられるのかと問えば、それは、彼らの「心」(精神)そのものは、すでに十二分に「充実している状態」であるので、ことさらに「豪華な食事や衣装あるいは豪邸」などを全く必要としないということこそ、最も大事なことであり、彼らは、真に「内的成長」して、うそ偽りなく、真に「内的充実」していたからこそ、まさに「生きながら涅槃の境地を楽しむこと」ができたということである。ただ、われわれは、そういう彼らの「精神的充実感」をほとんど理解できないがために、ただ外から見て、なにか「かわいそうな人生」のように思ってしまうということである。

*

*

例えば、イエスは、四十日間、荒野を孤独ひとりさまよっていたが、四十日目に「空腹」を覚

えた時に、悪魔が現われて、その悪魔から、「……神の子ならば、そこらの石ころに、パンになれと命令したらどうです」と、最初の誘惑を受けることになるのである。その時に、イエスは、「……人は、パンのみで生きるのはない」と言うわけだが、それは、パンは、確かに、肉体の「空腹」を満たしてはくれるが、しかし、心の「空腹」を真に満たしてくれるものではなく、心の「空腹」を真に満たしてくれるものは、むしろ神の「言葉」であるというのが、まさにイエス・キリストの「考え方」になるのである。——それを「仏教」で言い換えれば、それは、仏（仏陀）の「言葉」こそは、まさに心の「空腹」を真に満たしてくれるものであり、また、若いプラトンの心の「空腹」を真に満たしたものは、まさにソクラテスの「言葉」であったということである。

*

*

最後に、悪魔は、イエスを非常に高い山に連れていき、この世のすべての王国と繁栄とを見せて、「……もし伏してわれを拜むならば、これらすべてをなんじに与えよう」と、最後の誘惑を仕掛けるわけである。それは、われわれ人間が望み得るありとあらゆる「欲望」（望み）のすべてが手に入るぞという誘惑であり、できればそうありたいと誰もが望むようなものではあるが、それに対して、イエスは、「悪魔よ、消えて失せよ」と言うわけである。それでは、なぜ、イエスは、それを拒絶したのかと言え、それをプラトン風に言えば、この時のイエスは、すでに「欲望的部分」や「気概（激情）的部分」などの支配から完全に開放されて、いわゆる「理知的部分」（イエスの場合は、「神の言葉」）に全面的に支配されていたために、まさに「悪魔の誘惑」を何の躊躇もなく退けることができ得たということである。

それでは、若しもその「悪魔の誘惑」を受け入れたとしたら、一体、どういうことになるのか？ それは、イエス自身、まだ「最究極段階」（それは「神と完全に一体化している状態」）にまで到達して、いなか、つたということであるとともに、この世の実に様々な「欲望や感情」（つまり「煩惱」など）に死ぬまで絶えず振りまわされ続けることになるということである。そして、われわれ人間が望み得るありとあらゆる「欲望」（望み）のすべてを手に入れようとするならば、どうしても「悪魔の誘惑を受け入れる」（つまり「悪」に染まる）ことから逃れることはでき得ず、実に様々な「悪」の限りを尽くして、ありとあらゆる「望み」のすべてをたとえ手に入れたとしても、その人は、その人の「理知的部分」（その最も奥深い無意識の世界に内在しているであろう敢えて「内なる神」）によって、絶えず「内的制裁」（それは「罪の意識」や「良心の呵責」など）を受け続けなければならないという、そういう、まさに「宿命」^{さだめ}を内に宿すことにもなるのである。

*

*

誘惑を

退け説くは

神の愛

修行

修行について

例えば、「修行」というのは、いったい何のために行なわれるのかと問えば、小乗仏教においては、いわゆる「悟り」を得んがためのものである。それでは、その「悟り」とは、一体、何かと問えば、それは、本来の「大空おおぞらのような無色透明な心」を取り戻すということである。それは、一体、どういうことかと言えば、それは、次のようなことである。

つまり、われわれ人間の「心」そのものというのは、本来は、「大空おおぞらのような無色透明な心」であるにもかかわらず、俗世間のなかで日々あわただしく生活をしているために、われわれ人間の「心」というのは、どうしても実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまい、本来は、「大空おおぞらのような無色透明な心」であるにもかかわらず、実に様々な「変形（変色）」してしまっているのである。しかも、その実に様々な「変形（変色）」してしまった「心」を持って、つまり、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされている「心」を持って、あれこれ無分別に「行動（言動）」するからこそ、自分に対しても、また、他人に対しても、あるいは、社会や国家などに対しても、実に様々な「禍わざはひ」（不幸）をもたらしている最大の要因になっているのである。

それでは、その本来の「大空おおぞらのような無色透明な心」を取り戻すためには、いったいどうしたらよいかと言えば、その「一つの方法」が、まさに宗教における「修行」になるということである。例えば、なぜ、「俗世間」から離れるのかと言えば、「俗世間」のなかにいたのでは、どうしても実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまい、いつまで経っても、本来の「大空おおぞらのような無色透明な心」を取り戻すことは、なかなか出来にくい。そこで、その「俗世間」からしばらく離れて、いわゆる「山の中」に籠もって、俗世間のなかで日々あわただしく生活していたために、実に様々な「変形（変色）」してしまつた「心」から、本来の「大空おおぞらのような無色透明な心」を取り戻そうとするための「努力」こそは、まさに宗教における「修行」になるのである。

*

*

例えば、釈迦という人は、シヤカ族の王子として、何不自由ない恵まれた環境に生まれつき、確かに、生後七日で母親を亡くしてはいるが、十六歳の時には、美しい女性と結婚をして、一子（男の子）にも恵まれ、この俗世間で味わえる「幸せや楽しみ」などは、二十九歳までには、ほとんどすべて味わい尽くしていたということである。つまり、山ほどの美味しい料理を食べること。目も眩むほどの様々な物に充ちた豪邸に住むこと。様々な豪華な衣装や装飾品アクセサリーなどで身を飾り立てること。家族に恵まれること。ハーレムのような生活を送ること。芸術や芸能その他などを楽しむこと。社会的な地位を得ること。人から尊敬されること。容姿・容貌に恵まれること。欲しいものは、何でも手に入るような環境、その他、そのようなこの俗世間で味わえる「幸せや楽しみ」などは、すべて、少なくとも一通りは「体験・経験」していたということである。それゆえ、ふつうに考えれば、この上もなく幸せな人ということになるかと思うが、しかし、釈迦自身は、結局は、それらのどれにも満足できなかった。つまり、釈迦の「魂」そのものは、真に満たされることはなかったということである。

そこで、釈迦は、自分の「魂」そのものを、うそ偽りなく、ほんとうに深く満たしてくれるものにめぐり逢いたいということから、いわゆる「出家」をしたということである。

それは、例えば、空海なども、釈迦と全く同じように、凄まじいほどの「心の渇き」から、まさに凄まじいまでの「修行」を行なっているが、それも、結局は、自分の「魂」そのものが、うそ偽りなく、ほんとうに深く満たされることを、心の底から願ったということである。そして、われわれ人間の「魂」そのものが、うそ偽りなく、ほんとうに深く満たされる地点というのは、一体、どういう地点かと問えば、それこそは、まさに「悟り」の地点（つまり「涅槃の境地」の地点）に他ならないということである。

それでは、その「悟り」の地点（つまり「涅槃の境地」の地点）とは、一体、どういう世界かと問えば、それは、まさに「おおぞら大空のような無色透明な心」の状態になるとともに、いわゆる「三つの収穫」を得ることもなるのである。——一つは、「心の眼」が開けて、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも厳密に探究でき得るようになる。一つは、「愛」を内に宿すことよって、今までの本能に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行することになる。そして、もう一つは、真に叡知が働き始めて、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るようになるということである。そして、この「三つの収穫」を持って、「現実界」をその人なりに生きていくことになるかと思うが、それが、すなわち、生きながら「涅槃の境地」を楽しむということにもなるのである。

*

*

悟り得て

叡知働く

思索かな

惠

悪について

例えば、動物に「善悪」の意識はあるのかと問えば、恐らく、動物に「善悪」の意識はないのだろう。だとすれば、まさに「人類の誕生」とともに、いわゆる「善悪」の問題は、生じて来たことになるのだろう。それでは、「動物段階」では、まだ存在しなかったもので、人類に至って、初めて誕生して来たものとは、一体、何かと問えば、それは、まさに「知性や理性」ということになるかと思う。つまり、「動物段階」では、まだ未発達であったものが、人類に至って、初めてその「姿すがた」をはつきりと現わすことになったものとは、すなわち、「知性や理性」ということであり、その「知性や理性」の働きによってこそ、われわれ人間は、まさに「善悪」の意識を持つようになったということである。

そして、われわれ人間は、その「善悪」の意識を持って、毎日、実に様々なものを「見聞き嗅ぎ味わい触れ感じて」いることになるが、それでは、われわれ人間は、一体、何を「善」（よいこと）と感じ、そして、何を「悪」（悪いこと）だと感じているのだろうか？ それはもちろん、極めて微妙かつ難しい問題になるかと思うが、しかし、基本的には、次のようになるかと思う。——つまり、われわれ人間のなかに内在している「知性や理性」こそは、まさに「善悪の識別」を行なっている主体であるが、その場合、われわれ人間の「知性や理性」にかなうものは、一般的に、「善」（よいもの）として受け入れやすく、一方、われわれ人間の「知性や理性」が強く反発するようなものは、一般的に、「悪」（悪いもの）として受けとめやすいということである。

それでは、もっと具体的には、一体、何が「悪」（悪いもの）ということになるのだろうか？ 例えば、われわれ人間には、実に様々な「欲」があるかと思うが、それをそのまま「悪」（悪いもの）と呼ぶことは、できないのである。というのも、われわれ人間には、誰にも「……食欲、性欲、物欲、金銭欲、社会的地位欲、名誉欲、その他」などがあるかと思うが、それをそのまま「悪」（悪いもの）としたのでは、われわれ人間は、とても生きてはられないことになるからである。

例えば、若しも「食欲」それ自体を「悪」だとして、それを避けていたのでは、やがて、われわれ人間は、餓死してしまうだろう。また、「性欲」それ自体を「悪」として、「セックス」を避けていたのでは、やがて、子孫は絶えてしまうだろう。それゆえ、「性欲」それ自体が悪いのではなく、その「性欲」を満たすために、例えば、「……痴漢、強制わいせつ、強姦、その他」などの不正を働くところに問題があるということである。同じように「物欲」（或いは「金銭欲」）を満たすために、例えば、「……強盗、窃盗、詐欺、恐喝、ひったくり、万引、その他」などの不正を働くところに問題が生じて来るということである。すなわち、「欲」それ自体が悪いのではなく、むしろ、その「欲」を満たすために、実に様々な「不正」を働くところに、「悪」の問題が生じて来るということである。そして、その「不正的な行為」に対して、われわれ人間の「知性や理性」というのは、それを「悪」（悪いもの）と判断しているのである。

それでは、「悪」とは、すなわち、「不正的な行為」のことなのか？ むろん、そう簡単に結論を出すわけにはいかない。というのも、われわれ人間のなかに内在する「知性や理性」こそは、まさに「善悪の識別」を行なっている主体ではあるが、しかし、何を「不正的な行為」とみなすかは、各人それぞれ「個人差」が生じて来る場合に多いからで

ある。例えば、ある人の「知性や理性」にとっては、「不正的な行為」と見えるものでも、ほかの人の「知性や理性」にとっては、むしろ「正当な行為」と見えている場合もあるわけだ、そういうところに様々な「問題や揉め事」などをより複雑にしている要因の一つがあるのだろう。――すなわち、われわれ人間の一人一人の「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などは、それぞれみな微妙に違って来るといえる問題である。それゆえ、われわれ人間が休みなく行なっている実に膨大な「活動」(言動)のなかで、一体、何が「不正的な行為」であるかという判定には、それぞれ微妙に意見が分かれる場合が、非常に多いということである。

*

*

そこで、もう一度、「悪」について考え直してみたいと思うが、われわれ人間のなかに内在している「知性や理性」こそは、まさに「善悪の識別」を行なっている主体であることに間違いない。しかし、われわれ人間の「知性や理性」というのは、決して「完全なもの」ではなく、それゆえ、時には、様々な「欲望や感情」などに負けてしまい、悪いこととは知りつつも、ついつい様々な「悪いこと」をしてしまうものである。つまり、われわれ人間の「知性や理性」というのは、不完全であるがゆえに、どうしても様々な「欲望や感情」などと妥協しやすく、そのために様々な「悪いこと」にも荷担かたんしたり、あるいは、それを正当化しようとするものである。

一方、われわれ人間の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」から成る)であるが、その中でも最も奥深いところに内在しているであろう、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)というものは、決して「悪」を欲しないし、また、「悪」とは断じて妥協できない。なぜなら、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)というのは、いわゆる「善」という意識が生まれ出づるまさに「源泉」そのものだからである。それゆえ、「悪」とはどこまでいっても妥協できないとともに、「善」だけを望んで、決して「悪」を欲しないものである。――そして、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)こそは、まさにわれわれ人間の「良心」そのものの「源泉」そのものでもあり、しかも、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)というのは、まさに先天的に(生まれながらに)すでに内在しているものであり、そして、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)が、はつきりと反発するようなものこそは、まさに「悪」(悪いもの)ということになるかと思う。

さて、「悪」とは何か、という問いに対して、われわれ人類は、未だこれというはっきりとした「答え」を得られないままであるだろう。そこで、「悪」とは何か? という問いに対して、「悪」とは、われわれ人間の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」)であるが、その中でも最も奥深いところに内在しているであろう、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)が、はつきりと反発するようなものこそは、まさに倫理的に「正しくない行為」であり、また、まさに「不正的な行為」であるとし、それを「悪」という言葉の「第一定義」としてもよいのではないかと思う。

つまり、われわれ人間の「知性や理性」というのは、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうものであるが、しかし、いわゆる「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)というものは、そういう様々な「欲望や感情」などに振りまわされることもなく、絶えず「善悪の識別」を極めて公正かつ極めて微妙に行なっているものであ

り、それゆえ、それを敢えて言えば、まさに「内なる神」ということにもなるわけである。そして、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)というのは、本人にもまったく自覚できないものであるとともに、基本的には、様々な「欲望や感情」などに振りまわされることもなく、絶えず「善悪の識別」を極めて公正かつ極めて微妙に行なっている、まさに「源泉」そのものになるということである。

*

*

悪の源泉

悪の源泉

さて、「悪」の源泉は、基本的には「欲」（或いは「情」）になるかと思うが、しかし、「欲」そのものが、そのまま「悪」そのものであるということではない。

例えば、お金がほしいと思うこと自体は、決して「悪」ということにはならない。そうではなく、そのお金を得る方法が、「不正」である時に、初めて「悪」となるのである。また、物がほしいと思うこと自体は、決して「悪」ということにはならない。そうではなく、その物を得る方法が、「不正」である時に、初めて「悪」となるのである。或いは、人を憎むという感情それ自体が、そのまま「悪」ということにはならない。そうではなく、その恨みの感情にかられて、例えば、人を傷つけたりすれば、その「不正的な行為」が、一般に「悪」ということになるのである。だとすれば、「悪」とは、すなわち、「不正的な行為」のことなのか。恐らく、そうなのだろう。それでは、その「不正的な行為」は、一体、どこから生じて来るのだろうか？ それは、様々な「欲望や感情」などに振りまわされて行動した時に、ふつう「不正的な行為」が生じやすくなるのである。もちろん、様々な「欲望や感情」などに振りまわされて行動したことが、すべて「不正的な行為」になるというのではない。もちろん、そうではない。しかし、「理性」によって様々な「欲望や感情」などが強く抑制されていれば、ふつう「不正的な行為」は起こりにくいものである。それゆえ、「理性」を欠いて様々な「欲望や感情」のままに行動した時にこそ、実に様々な「不正的な行為」が生じやすくなるのである。それでは、ある「行為」を「不正的な行為」と判断するのは、一体、何かと問えば、それは、われわれ人間の中にある「理知的部分」ではあるが、その「理知的部分」の中でも最も奥深くに内在しているであろう、いわゆる「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）こそは、極めて微妙な「善悪」をも厳密に感じ分けているのである。——ちなみに、「悪」そのものとは、すなわち、「不正そのもの」であるが、それが「不正」であるかどうかの極めて微妙な判断は、いわゆる「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）が行なっているのである。

例えば、ある人が、「頭の中」で「ある人を殺したい」と思ったとする。その場合、そう思ったということだけで、いわゆる「悪」（罪）になるのだろうか。これは、非常に難しい問題であり、そう思うだけでも、いわゆる「悪」（罪）になるという考え方は、例えば、『聖書』のなかに次のような言葉がある。「……あなた達は、『姦淫をしてはならない』と命じられたことを聞いたであろう。しかしわたしはあなた達に言う、情欲をもって人妻を見る者は皆、すでに心の中でその女を姦淫したのである。それで、もし右の目があなたを罪にいざなうなら、えぐり出して捨てよ。体の一部が無くなっても、全身が地獄に投げ込まれない方が得であるから。もしまた右の手があなたを罪にいざなうなら、切り取って捨てよ。手足が一本無くなっても、全身が地獄へ行かない方が得であるから。……」という言葉があるが、これは、もう誰も実践できないだろうし、また、これを実際に実践したら、五体満足な人間などほとんどいなくなってしまうだろう。それでは、なぜこのような考え方が生まれて来るのかと言えば、それは、次のようなことである。

例えば、「ある人を殺したい」と思うことは、やがてそれを実行に移す「可能性を孕む」ことになるとともに、そういう「想い」に取り憑かれた人間は、例えば、ハムレットのように自分だけではなく、まわりの人間をも「不幸」に巻き込むことになるからである。す

なわち、「想う」ということは、やがてそれを実行に移す「可能性を孕む^{はら}」ことになる。ともに、「想う」ことよって、その人だけではなく、まわりの人間をも巻き込むことになるからである。例えば、「何か復讐をしてやるぞ」と思うことは、やがてそれを実行に移す「可能性を孕む^{はら}」ことになるとともに、そういう「想い」に取り憑かれた人間は、そういう「想い」に取り憑かれていて、こと自体、「幸せ」な精神状態とは言えないものであり、まわりの人間をも「禍^{わざわい}」（不幸）へと巻き込む可能性があるということである。

とは言え、ただ思うだけで即「悪」（罪）であるとしたら、われわれ人間は、もう一時間たりとも生きてはいられないことになる。それゆえ、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）で何を思い、何を考えようと、その人の「自由」とし、実際に何らかの「不正的なこと」を行なった時に、初めて「悪」（罪）になるとする方が、より現実的な「認識」になるのだろう。——確かに、「不正的なこと」を思うこと自体、そもそも「不正的な意識」（つまり「悪の芽生え」）ではあるが、しかし、「不正的なこと」を思うこと自体を、すぐに「悪」（罪）であるとする考え方には、やはり少し無理があるのだろう。だとすれば、「不正的なこと」を思うことは、まさに「不正的な意識」（つまり「悪の芽生え」）とし、そして、実際に何らかの「不正的なこと」を行なった時に、初めて「悪」（罪）になるとする考え方のほうが、最も理にかなった認識になるかと思う。それでは、「悪」そのものとは、一体、何かと問えば、「悪」そのものとは、すなわち、「不正そのもの」になるが、それが「不正」であるかどうかの極めて微妙な判断は、いわゆる「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）が行なっていることになるのである。

ところで、ソクラテスという人は、クセノフォンの『ソクラテスの思い出』という作品のなかで、「……自分は一生涯をただ正義と不正とを考究することと、正義を行ない不正を避けることについてやして来たのである」とあるが、それは、ソクラテスという人は、いわゆる「欲望的部分」や「気概（激情）的部分」などの支配から離れて、いわゆる「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）に全面的に支配されていたとともに、その中でも最も奥深くに内在していたであろう、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）に全幅の信頼を寄せて、その一生涯を、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）の純粋な判断に全面的に身をゆだねていたということである。そして、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）こそは、まさに「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）というものの「源」（源泉）にもなっているということである。

*

*

原罪

原罪について

さて、「悪」の問題を考える場合、宗教的には、いわゆる「原罪」という問題があるかと思う。それは、旧約聖書の『創世記』のなかに出て来るものであり、神が最初に創り出した人間であるアダムとイブは、エデンの園で幸せに暮らしていたという。ところが、ある時、イブは、ヘビの「誘惑的な言葉」に負けて、「神」から決して食べてはいけないと言われていた、いわゆる《禁断の「木の実」》をアダムと一緒に食べてしまうわけである。それが、まさに「原罪」であり、その「原罪」のためにこそ、アダムとイブは、まさに「エデンの園」から追放されるとともに、そのアダムとイブの子孫であるわれわれ人間というのは、どうしても様々な「欲望や感情或いは誘惑」などに負けてしまうという、そういう、どうにもならない「宿命」（言わば「遺伝子」）を、生まれながらに持ち合わせている存在になってしまったという「考え方」になるかと思う。

ところで、天地創造の「神」というのは、本来、決して「悪」を欲せず、常に「善」だけを欲するような存在であるがゆえに、それは、まさに「知性（理性）的存在」と言えるものである。そして、その「知性（理性）的存在」である天地創造の「神」の命令というのは、そのまままさに「神」の「知性（理性）」そのものからの絶対的な「命令」ということになるかと思う。——ところが、アダムとイブは、その天地創造の「神」から決して食べてはいけないと言われていた《禁断の「木の実」》を、二人して食べてしまうという、まさに「神」の絶対的な「命令」に敢えて逆らった行為をってしまったということである。——つまり、ここで最も大事なことは、天地創造の「神」（それは「知性《理性》的存在」）から、「決して食べてはいけない！」と言われていたにもかかわらず、いわゆる「誘惑」に負けて、その《禁断の「木の実」》を食べてしまったということであり、それが、われわれ人間が「神」の命令に敢えて逆らって行なった、まさに最初の「罪」（つまり「原罪」）ということになるわけである。

そして、その「原罪」というのは、何もアダムとイブだけの問題ではなく、むしろ、われわれ「すべての人間」にとっても決して他人事ではないのである。というのも、「……神はアダムを創造したとき、神に似せて彼を創った」という言葉があるが、それは、すなわち、天地創造の「神」の「知性や理性」に比べれば、遙かに劣った「不完全なもの」であるにしろ、基本的には同じような機能（働き）を持つ「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」を宿した存在として、この世に創り出されたということである。だからこそ、われわれ人間は、ほかの動物たちとは違って、あれこれ物事を深く考えることも、また、様々な「人工物」をこの世に生み出すこともできるわけである。そして、アダムとイブの場合には、天地創造の「神」の「知性や理性」から生じた「命令」である、決して食べてはいけないという《禁断の「木の実」》を、いわゆる「誘惑」に負けて食べてしまうわけだが、それと全く同じように、われわれ人間の「理知的部分」の最も奥深くに内在しているであろう、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿すからの、いわゆる「……何々をしてはいけない」という声に敢えて逆らった行為をしようのも、われわれ人間というのは、どうしても様々な「欲望や感情或いは誘惑」などに負けてしまうという「宿命的な弱さ」を宿しているからである。

それは、一体、なぜかと問えば、宗教的には、それがまさに「原罪」ということになる

のだろうが、それを今日的に解釈をすれば、それは、われわれ人間の様々な「欲望や感情」というのは、ほかの動物たちにも共通した「より根源的なもの」であるのに対して、われわれ人間の「理知的部分」というのは、動物から人間へと進化して来る過程で生じてきた、まだ極めて「不完全なもの」に過ぎないからである。それゆえ、もしわれわれ人間の「理知的部分」が天地創造の「神」の「知性や理性」のように、いわば「完全無欠なもの」であれば、様々な「欲望や感情」などに振りまわされることもないのだろうが、われわれ人間の「理知的部分」というのは、それに比べれば、遙かに劣った「不完全なもの」であるがゆえに、いわゆる「頭」(つまり知性や理性)ではわかつていても、どうしても様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうという「宿命的な弱さ」を宿しているとともに、その「宿命的な弱さ」こそ、まさに様々な「悪」(或いは「罪」)が生じて来る「源泉」にもなるわけである。——というのも、天地創造の「神」の「知性や理性」であれば、本来、様々な「欲望や感情或いは誘惑」などに負けることはなく、それらを完全な形でコントロールできるはずであり、それゆえ、決して「悪」は生じて来ないものであるが、一方、われわれ人間の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」というのは、まだ極めて「不完全なもの」であるがゆえに、どうしても様々な「欲望や感情或いは誘惑」などに負けてしまうという「宿命的な弱さ」を宿しているために、そこから様々な「悪」や「罪」などが生じることもなるわけである。

*

*

それでは、われわれ人間の「理知的部分」の最も奥深くに内在しているであろう、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)からの声に敢えて逆らった行為をした時には、その「行為」は、すべて「悪」であり、「罪」であるということになるのだろうか？ この「問いかけ」は、極めて難しい問題であるとともに、極めて「興味深い問題」(つまり「問いかけ」ではないだろうか？ ——というのも、何を「悪」と呼び、何を「罪」と呼ぶかという大問題に対して、それは、われわれ人間の「理知的部分」の最も奥深くに内在しているであろう、その「母体のようなもの」(内に「善のDNAを宿す」というものからの、「……何々をしてはいけない」という声に敢えて逆らった行為をした時にこそ、大原則として、何らかの「悪」(或いは何らかの「罪」)が生じていることになるからである。少なくとも、その人自身は、何らかの「悪」(或いは何らかの「罪」)が生じているという「自覚」が生じていることになるのである。

もちろん、それにも「個人差」があり、たとえ同じことを行なっている、ある人は、それほど「罪の意識」を感じないのに、ある人は、非常に強い「罪の意識」を感じている場合があるのだろう。それは、なぜかと問えば、それは、われわれ人間の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」というのは、天地創造の「神」の「知性や理性」に比べれば、遙かに劣った「不完全なもの」であるがゆえに、天地創造の「神」のように完全なる形での「善悪の識別」が、われわれ人間にはまだ十分にでき得ないとともに、われわれ一人一人の「内的成長(成熟度)」の度合いにも正比例して、その「善悪の識別」に個人差が生じて来るからである。そして、確かに、各人それぞれに「個人差」はあるだろうが、しかし、一方、同じ人間である限りは、全人類に共通した「善悪の識別能力」を誰もがみな同じように持ち合わせているとともに、その「善悪」の極めて微妙な違いまでも感じ分けているものこそは、まさにわれわれ人間の「理知的部分」の最も奥深く

に内在しているであろう、その「母体のようなもの」(内に「善のDNAを宿す」)である
ということになるのである。

すなわち、われわれ人間の「理知的部分」の最も奥深くに内在しているであろう、その
「母体のようなもの」(内に「善のDNAを宿す」)が反対するようなことを敢えて行なう
ことは、大原則として、何らかの「悪」(或いは何らかの「罪」)が生じているというこ
とになるとともに、その反対が強くなれば強くなるほど、それにほぼ正比例して、それだ
けよりはつきりとした「悪」や「罪」になるということである。それとともに、われわれ
人間の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」から成るもの)である
が、その中^{なか}でも「母体のようなもの」(内に「善のDNAを宿す」というのは、自分の「言
動」だけではなくて、他人の「言動」に対しても、それが「悪」であるかどうかの極めて
「微妙な識別」も同時に、その人なりに行なっているということである。

*

*

「参考文献」

- ※底本 「ツアラトウストラはこう言った」 氷上英廣訳（「岩波文庫」）
- ※底本 「世界の名著・大乘仏教」（「中央公論社」）
- ※底本 「新約聖書・福音書」 塚本虎二訳（「岩波文庫」）